

新刊ニュース

聖グレゴリオの家は宗教音楽研究所でもあるので、主に教会音楽に関する文献を中心にご紹介してきましたが、今回はそうではない書籍をとりあげます。教会音楽といってもそれは教会外のような世界とつながっていますのでそこだけで完結するものではありません。また、教会音楽に携わる人も広く音楽一般の見識が求められます。

+ トワノ・アルポー著「オルケソグラフィー；全訳と理解のための手引き」(道和書院)

16世紀の舞踏書の古典、オルケソグラフィーの全訳と注解です。非常に長い時間をかけて翻訳作業に取り組んでこられました。舞踏家と音楽学者との共同作業です。舞踏はもちろん音楽と深い関係があります。音楽の視野と裾野を広げるためにも興味を持っていただけたら嬉しいです。このなかに出てくるアルポーの有名なパヴァーヌ *Belli, qui tiens ma vie* の楽譜ファクシミリとモダン譜は MC2/A664/1 にあります (コピーですが)。

+ バルトルト・クイケン「楽譜から音楽へ；バロック音楽の演奏法」(道和書院)

トラヴェルソ奏者のクイケンの著書。内容はバロックの演奏法に特化していますが、音楽の演奏そのものに対する哲学と音楽への深い知見に基づいた書で単なる技術的な、あるいは知識だけが得られる教科書ではありません。読み手一人一人の音楽造りにかかわってくるといえます。

+ 浅香武和「吟遊詩人マルティン・コダックス；7つのカンティーガス」(論創社)

13世紀のイベリア半島に残るカンティガ・デ・アミーゴと言われる歌謡の研究です。聖母マリアのカンティガ集は有名ですがこれは世俗の恋の歌。中世にはめずらしく、女性が歌う内容です。しかもトルバドゥールのように貴族の女性ではなく一般の庶民の若い乙女の歌です。第4章「カンティーガスの音楽について」は私が執筆しています。中世音楽史の観点から演奏解釈まで。付録 CD は私の解説に基づく演奏です。オリジナル写本のファクシミリ (カラー版)、詩の注解と日本語訳(中世ガリシア語から)はガリシア語文学専門の浅香氏です。「音楽を通して知る中世」の一側面を感じ取ることができると思います。

(杉本ゆり 記)